



Title	萩原広道の文章法則論とその『源氏物語』への適用、 付法則の索引
Author(s)	パトリック, カドー
Citation	詞林. 1997, 21, p. 48-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67398
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

萩原広道の文章法則論とその『源氏物語』への適用、付法則の索引

パトリック・カドー

一 はじめに

嘉永四年（一八五二）、国学者の萩原広道は、出版予定の新しい『源氏物語』注釈書について、歌道の友人鈴木高輅にあてた手紙に次のように書いた。

夫ニ付先年少々こしらへ懸置候源氏之注尺を蔵板ニ至候つもりにて、此節類ニいとなみ居申候、注尺の例ハ契沖、為章、懸居、鈴屋のものを擬として愚案をましへ、湖月抄已前之注ハ無拠処斗ニ少々くハへて何レも頭書ニし、本文ハ傍注ニて漢字と俗語とを訳注ニつけ、素人ニもたやすくよめ候様ニいたし申候、外に評語の注をむねと加へ申候、これハ先達未発の説ニて候へとも、名文の名文たる故を評し著し候ニて、先ハ拙一家の論ニ候へとも不得止事しわざニて、文法の則ともなれかしと思候迄ニ御坐候、よしやあしハ不知、上木さへ至候ハ、湖月抄ハ倒れ可申候。

要するに、初心者も『源氏物語』を読めるように、種々の注釈書の解釈を集め頭注として本文に付け、本文の傍に漢字を当て、俗語訳も付け加える形の『源氏』本文と注釈を出版するつもりであること、いかに『源氏』が優れている書物であるかを説明するために、今までの『源氏』注釈書で使われていない『文法の則』をこの注釈に適用すること、出版さえすれば『湖月抄』は倒れて、この新しい注釈書は注目すべきものになるということであろう。

これを書いた三年後（一八五四）に広道は『源氏物語評釈』（以下は『評釈』）の一之巻（『夕顔』まで）を出版し、十年後（一八六二）に二之巻（『花の宴』までの本文注釈）を出した。しかし二之巻を出版して二年後（一八六三）に、長く健康を害していた広道は、『評釈』を完成することなく没した。従って右の手紙に書かれた特徴を全て果たし、またその出版のおよそ百四十年後の現在からみても、相当の完成度を示しているにもかかわらず、結果的に『評釈』は北村季吟の『湖月抄』を倒すことはできなかったのである。その上、江

戸時代以降には「評釈」はあまり研究の対象にはならず、「源氏」注釈史の飾り物としてしか認められていなかったように思われる。実は昭和の末頃から平成の初頃までの約十年間には、源氏研究の世界では「評釈」に関するミニブームがあったのだが、その研究は「評釈」の細部を断片的に探究するようなものが多く、全体的な「評釈」研究は今まで出ていなかった。この欠陥を補う一歩として、広道が「源氏物語」の本文に適用した独特な批評用語の索引を作った。

二 広道の文章法則論

索引を紹介する前に、概説的に「評釈」の特徴について記してみたいと思う。広道は「評釈」の序文で、一般の読者のために物語の鑑賞と解釈の方法を紹介し、批評用語目録を作り各用語の定義も付け加えた上で、その方法を本文に全面的に適用した。その達成は江戸時代の文学批評史だけではなく、各国の各時代の文学批評史を調べても非常に珍しいものだと言えるだろう。² 本文の注釈が「桐壺」から「花の宴」しかないのにも拘わらず、言葉と言葉の繋がりにから物語全体の幅広い課題にまで係わっていく広道の批評論は、注を付された本文以外の細部や話題にまで及んでいる。例えば「帚木」には、物忌みのため伊予介の家に寄って空蟬の君と出会った源氏が、彼女との再会を意図して紀伊守と付き合う場面があ

る。その叙述の途中で話題が急に源氏から紀伊守に転換し、次の文が差し込まれる。

きのかみすき心に、このまゝは、のありさまをあたらしきものにおもひて、つゐしようにしよる心なれば、この子をもてかしづきてゐてありく。³

すなわち紀伊守も空蟬（継母）に情念的な興味があり、空蟬の弟の子君を利用して空蟬に近づこうとしているのである。広道は読者のためにこの文章を次のように評した。

紀守が子君をゐてゆくにつけて、継母に心をかけたる事を説出て、つひに此事によりて空蟬の尼になるべき伏案とせられたる、いとめでたし。かゝる事どもすべて此物語の法なれば心を付べし。³

本文の内容を纏めつつ、この場面が、後に「閑屋」で空蟬の出家する動機の源泉であると説明しているのである。広道は読者に対して意外に思われるようなこの「源氏」本文の意味を明らかにするだけではなく、物語のはるか後の出来事がここで巧みに予示されているという事も注意している。そしてこのような素晴らしい叙述技術の一つである「伏案」という法則（「法」）が見られたと指摘する。この注釈を考えながら「閑屋」で未亡人になったばかりの空蟬を紀伊守が訪れた後、空蟬が急に尼になる事を決心する節を読めば、広道の細かい配慮が分かると思う。こういった例はこれ一つにとどまらない。自ら考案した批評用語を駆使することで物語を説

三 文章法則論の用語

明していく方法は、物語の細部の扱い、登場人物の相対的な役割、全体的な話題の発達など、要するに物語の文体と構造を解釈するために本文に度々適用されているのである。さらに序文（「総論」）の批評論と本文の注釈を合わせて見ると、物語全体を目指す鑑賞評論と綿密周到なテキスト分析が一つの書物にあることが理解されよう。「評釈」の優れた点はまさにここに認められる。

しかし、広道の批評論とその本文への適用とを比較することは簡単な作業ではない。なぜなら広道の批評論は、物語の無数の細部、出来事、登場人物の心などを全て一つの抽象的な組織によって包含しようとする複雑なものだからである。この組織（法則）の対象は、最大の単位である「物語一部」から物語の一巻、一条、一篇文章、一句、つまり物語の「いささかなる事の末々まで」及ぶ。読者がある程度までこの組織を認識さえすれば物語の素晴らしさを味わえると広道は推測したのであろう。この抽象的な組織によって物語の無数の出来事の関係や叙述の微妙な差異は明白になる。そしてこの組織は本文と読者を媒介するはずだから、一方では物語の複雑さを平易な形になおす機能があり、他方ではこの複雑さ故に「源氏」本文の奥深さを読者に伝える事もできるのである。従って、この珍しい批評組織のどこが優秀であり、どこが欠点になるということを探究する作業には価値があると思う。

さて、広道の批評論は、「評釈」の「総論」下の二箇所に紹介されている。一つは概念的に中国と日本での文章批評史の流れを説明し、「源氏」にも批評の法則を適用して物語の素晴らしさを鑑賞する事ができるとする「此ノ物語に種々の法則ある事」という部分で、一つは、「源氏」の本文に適用する批評用語とその用語の定義する部分である。最終的な目的としては、「評釈」に述べられている批評用語の沿革、定義、適用などを全て調査するつもりだが、今回は後者の定義されている法則を掲載順に取り上げ、考察の及んでいる項目に用例や稿者の説明などを付け加えることにする。

* * *

一 文章を批評したることは。我皇國の書にはをさをさ見へず。大かたは今始めてものすることなれば、其さまをもろこしざまにならひたり。其よしは上条に既にいへり。其法則のかりの名どもを、こゝに挙て大むねを注す。これはたゞ初学のためのみなり。さて此目どもは、もろこしにいへるをさながらにとれるもあり。又此物語の注に昔よりいへるを用ゐたるもあり。又今あらたに余がつくれるもあれど、事のさまのさとりやすきを主として、あながちにもろこしの例格に拘わり泥まず。見ん人さるこゝろしていふかしむべからず。

主客

人と人と相対ひて事ある時、其むねとあるかたを主といひ、その主たる人のためにして、対へる方を客といふ。これによりて、其所の文に内外の差あり。又其卷其段につきて主客の法あり。准へて知るべし。

正副

軍を出すに、大將軍と副將軍とあるがごとく、その主とある方を正とし。それに付屬へる方を副とす。これにつきて文法に輕重あり。

正対

人にまれ、もの事にまれ、同じほどの事を相対へて、優り劣りなきを正対といふ。これはただに對といひても有べけれど、次の反對にむかへて正字を加へたるのみ也。

反對

これは其事の反うへに相對ふをいふ。たとへば雨ふるど日てると、夜と昼となどのごとし。其事同じからずといへども、表裏に相對ふをもて反對といへり。

「主客」又「主賓」は、曲亭馬琴の著作「南総里見八犬伝」の「九輯中帙附言」のいわゆる「稗史七則」や、毛声山による「三國志演義」の注（「讀三國志法」）にも見られる批評用語の一つである。馬琴や毛声山の適用と同じように、「評釈」の「文章法則」論では、物語の出来事を進める登場人物

のうちに中心的な役割をするのが「主」であり、その中心人物の動きを支持するのが「客」であるとす。概して源氏は「主」の役である。しかし、広道の注釈には、源氏がある場面ですべて「客」の役をしようと、読者が意外に思い、その珍しさで物語を読む事の楽しみがあると記されることがある。例えば、「帚木」の雨夜の品定めでの左の馬頭の長い弁論において、源氏は最初に質問するものの途中で寝てしまう。ここまでは普通にみられた源氏「主」と頭の中將「客」の関係が崩され、左の馬頭が「主」、源氏が「客」の役となる。広道は次のようにこの場面の「評」を記す。

この二人（左の馬頭と式部の丞）をあらはし出されたる、いとくめづらし。この品定、源氏君と頭中將とのみにてはいとさうくしければ、この二人をそへてにぎは、しくしたる也。然るに却て馬頭主となりて物うちいひ、主とあるべき源氏君はなかくに打ねふりなどし給へるさまにかゝれたる、さらにいとめづらしくをか。……たゞこの品定にのみむねと物いひたるばかりなるも、思ひの外のこゝちしていとめづらし。

叙述の流れとして馬頭が語り、源氏がその物語の聴講者になることは、読者にとって特に意外なことにはならない。しかし、物語の構造から見ると、不断に「主」の役をする登場人物が突然に「客」として振る舞うことは予想外の変換になる。登場人物が必ず予想通りに行動すれば、物語には本当ら

しさや刺激がない。従つて、予想外の変換があるからこそ読者には物語を読む楽しみがある。読者はこのような巧妙な構造操作を普通は意識せずに物語を読むのだが、広道の平易な言葉を通してこの叙述技法を鑑賞することができるようになる。「文章法則」論の抽象的な組織の実利は、この解説から窺われるであろう。索引の「主客」の項目で、「主」または「客」の字を付した箇所は、注釈にどちらか一方の情報があつた場合を指す。

「正副」「正対」「反對」は、「主客」をさらに詳しく説明する用語である。「正副」の代表的な人物関係は、源氏「主」又「正」と、頭の中將「客」又「副」である。「反對」の代表的な事人物関係は、源氏と弘徽殿の息子（皇太子）である。ただし「正対」を本文に明記した例は見当たらない。索引に挙げるのは、「総論」でのこの用語の機能を定義する所だけである。

* * *

照対 照応

この二つ大かた同じさまなれど、照対は一事の相似たるさまを再びあらはして、前の事に相照し対へたるをいふ。たとへば日と月と東西に光をあらそふがごとし。照応は、前に出たる事の末、あへなく消失せずして、再び其脉をあらはして、前の趣に相応くをいふ。たとへば日の光をうけて、月も星も光をはな

つがごとし。

「照応」も曲亭馬琴の「稗史七則」や、毛声山の「読三国志法」に見られる批評用語の一つである。「稗史七則」では「照応は照対ともいふ」と記されているが、広道は「照応」と「照対」に微妙な区別を付けようとした。この故をもって索引では「照応」と「照対」を別の項目として載せる。この二つは「総論」の批評用語目録の後に挙がる「伏案」「伏線」の相似物とすることができる。「伏案」「伏線」は物語の後の出来事を予示する機能を果たし、「照応」「照対」は物語の先に行われた出来事に呼応する関係を表す。まず、「照対」と評されるのは、物語に平行的に存在する出来事である。例えば、「花の宴」中では藤花の宴があり、広道の「評」は次の如くである。

（ここは物語の前の）南殿の花宴の照対に右大臣家の藤花、宴をあらはし、

つまり、物語の叙述の流れとしては南殿の花の宴と右大臣の藤花の宴には強い関係がないが、物語の構造の面で考えると、この二つの場面は一つの出来事の反復であると考えることが出来る。「照対」と違い、「照応」と評される事は、物語の先に行われた出来事とはつきりと関係がある。例えば、「夕顔」では源氏が惟光から初めて空蟬の貧しい状況を聞き、雨夜の女性の品定めの話（「帯木」）を思い出して、空蟬に対する好奇心を表す。源氏の品定めと思い出が「照応の

脉」としてこの節に付けられている。^①

* * *

間隔

一つの事を語りもてゆくに、一つらに書つゞけては、いと長く煩はしくなりて、見ん人の倦んことを思ひはかりて、暫く切斷て其間に他事を挟み隔るをいふ。たとへば遠く海山を見るに、所々雲霧のへだりて、なか／＼にけしきをかしく見ゆるがことし。此法卷中に殊に多し。

「間隔」を適用した例は、「紅葉賀」に見られる。「紅葉賀」での主な話題は源氏と藤壺の密通による懷妊であり、藤壺の出産であるが、叙述の流れが時々若紫、または葵の話に転換する。広道の解釈では若紫や葵の場面は、「紅葉賀」の本筋に挿入された筋であり、「間隔」の法則の例と記されている。

* * *

伏案 伏線

この二つおほかたは同じ事也。伏案は、末にいふべき事を思ひ構へて、ひそかに其端をあらはしなから、せおく事也。伏線の線は糸すちとよむ字にて、遠くいとすちの端を置いて、をり／＼其縫めをあらはしつゝ、末に至りて結びる時、其糸ぐちを引ば、貫きたるぬひめ悉く動くことの如し。又結構といひ

たる所あるも同じ類也。結構はしたがまへの事也。

「稗史七則」では馬琴が「伏線」と「襖染」の例を挙げ、その二つの用語の意味を比較し、微妙な違いを付ける。^②広道はここで「伏線」と「伏案」にも同じような区別を当てようとしている。「伏案」は物語の大きな構想が叙述の細部に隠されているというものであり、読者がその大きな構想を理解するまで細部の重要さを味わうことができない。例えば、「桐壺」では高麗の相人占の節に関して、次の「評」がある。

この一段は、源氏君一代のうちに有べき事を思ひかまへてこの相人にいはせたるにて、いともいとも巧みなる伏案なり。よくよく心を付べし。初にかたちにくめてたきをいひ、次に才能のいみじきをいひ、こゝに至りて一世の吉凶をことわれる伝文の法なり。これより下の詩文の事どもは、たゞこのにほひにかきそへて源氏君の秀才なるよしをほめたるまでなり。^③

つまり、作者の精巧な考案により、光源氏の優れている才能と将来の事はこの細部に予示されているのである。一方「伏線」は、読者に所々筋を見せてその重要性を教えるものであり、読者はやはり最後まで読まないと、その筋と物語の大きな構想との関係が推測できない。「伏線」の代表的な例は「夕顔」に見られる「変化のもの」の筋である。「夕顔」の十五箇所の頭注に広道は「変化の第幾段の脉（筋）」を示す。大半の「変化」は狐に関する情報であり、物語の流れと

して自立的な重要性を持たないが、夕顔の死亡する場面までを読めば、その「変化」の集合的な意味が見えてくる。「夕顔」の主な出来事に関し、全ての筋は夕顔の死亡を预示するものだから、広道はこれを「伏線」と評したわけである。「伏線」「伏案」「結構」の適用の傾向を区別するために、索引では別個の項目として載せる。

* * *

抑揚

抑はおさふること、揚はあぐることにて、文の勢をなす法なり。たとへば柄確の頭を揚んとしては、其尾をつよく踏抑ふるがごとく、事がらをつよく揚ていはんとて、前つかたを抑へてかくをいへり。

「抑揚」の代表的な例は、源氏と皇太子の關係に出てくる。物語の最初から源氏には魅力があり、天皇に殊に愛されたが、一のみこは皇太子候補として世間からも大切にされているという關係が立てられている。例えば、源氏が生まれた直後の節（「桐壺」）は次の如くである。

（天皇は）いそぎまゐらせて御覽するに、めづらしかなるちこ（源氏）の御かたちなり。一のみこは右大臣の女御の御はらにて、よせおもく、うたがひなきまうけの君、と世にもてかしづき聞ゆれど、この御にほひには（源氏の体）、ならば給ふべくもあらざりければ、おほかたのやんことなき御おもひにて、この君をばわたく

しものにおもほしかしづき給ふ事かぎりなし。^①
この描写では素晴らしい姿の源氏と、具体的な細部の一つも伝えられていない皇太子とが紹介される。広道はこの節に次の「評」を付した。

主客の法を設けて、初めて朱雀院の御事を書出せり。これやがて源氏君の方と弘徽殿の方と反對して、御中のよからぬ事を語る最初の筆なり。さて一のみこの御勢ひのいみじきことを揚いひて、却てそれにもまさる若宮の御寵愛の甚しき事をいへる抑揚いとめでたし。^②

この簡単な描写に広道は三つの法則の働きを察知した。源氏と皇太子の關係は「主客」であり、源氏と皇太子の母、弘徽殿は「反對」の役であり、その二つの關係を強調するために「抑揚」と言う法則の働きを指摘している。この技法で、皇太子は褒め上げられるものの、さらに源氏はその皇太子に勝っていると褒められる。結果的に皇太子が「抑」えられ、源氏が「揚」げられる「抑揚」となっているのである。

* * *

緩急

字のごとく緩きと急しきと也。其事を叙ること、緩き時は静にして、長き春日のうらかなるに、処女子の野辺をゆくがごとく。急しき時はすみやかにして、野分の風の、梢をまきてすぐるがごとし。各其事にしたがひて書ざま異なり。

反覆

事の急^{ニハカ}にうらがへりて、前の勢^セにいたくたがふを云。さるはわざとしか反覆^{ワタタカ}して見ん人におもひの外の事と驚^{オドロ}せんため也。たとへばしづかにすみわたりける月影の、俄にかきくもりて、神いみじく鳴はためきたる夕立の雨の、たちまちに降来たらんがごとし。

* * *

省筆

事の長かるべきをいたく約^ツめて、前後^{イマサキ}のさまによりて、かゝる事と見ん人にさとしむる類^ヒ。また他にてありし事を、人の物語の中にいはせて其趣^{オモ}をしらしめ、或は煩^{ワザ}はしきをいとひて省けるなどの類^ヒをすべて省筆といふ。

「省筆」は曲亭馬琴の「神史七則」や、毛声山の「読三国志法」に見られる批評用語の一つである。傍線を付した省筆の例を挙げると、「若紫」で、源氏が紫上の姿を垣間見て紫上の祖母、尼君と紫上の話を漏れ聞く場面がある。広道は次のようにこの節に「評」を加えた。

尼君の物語の中に、紫上の父母のゆゑよしを顕し出せる省筆の法、いとめづらしくめでたし。

つまり、地の文ではなく尼君の話に組み入れる「省筆」という叙述技術を利用し、若紫の状況（母が亡くなり、父に放棄さ

れた）を効果的に伝えているわけである。

* * *

余波

大^{オホ}じき事を書はてたる後に、其なごりのあへなく消失^{シユツ}事を惜^シみて、其けしきなど書そへて引延たる類^ヒをいふ。余波はいはゆるなごりにて、大波の引去りたる跡に、猶さゝら波しづまらず。遠浅^{トホアサヒ}に潮の遺^{ノコ}りてやうく引さるさまに譬^ヒへていへり。

種子

これかれの物語の間つきなき時に、物一ツとり出て、物語の種子^{タネ}とする事也。若紫の雀子、女三宮のから猫の類ひなり。

* * *

報応

これはいはゆるもの、報^{イカゲ}の応^{オウ}ずるをいふ。其事の報に彼事をあらはして、もの、道理を均^{ヒトシ}くすること也。

諷諭

今の現^{イマ}にある事に諷^{フウ}へて、一ツの事をあらはし出つゝ、もの、ことわりを諭^{サト}すをいふ。この二は、作者^{ソウシャ}の心の中にある事なるを、推量^{スイリヤウ}りて云也。

「報応」「諷諭」は、「評釈」以前の「源氏」注釈書からの用語である。安藤為章の「紫家七論」は、特に「総論」の「一部ノ大事といふ事」と言う章に述べられている論議に影

響を与えた。この二つの用語に関していえば、定義はわかりやすいものの本文への適用は、ほとんど見られない。

* * *

文脈 語脈

文脈とはつらねもてゆく文章のすぢをいひ、語脈は語のかゝりゆくすぢをいふ。此すぢの続きて、事の意を貫き通すこと、人身に脈ありて、体中を貫き通れるがごとし。又伏線の条理を、脈といひたる所もあれど、こは別事也。

「文脈」「語脈」の適用の傾向を区別するために索引では別個な項目として載せる。この用語は、おおむね言葉や文章などの論理的關係を説明する箇所に適用される。

* * *

これ以下は「評釈」以前の「源氏」注釈書からの用語である。しかし、広道の適用はかならずしも以前の注釈書の引き写しにならず、改善した部分もある。索引では広道が「評釈」以前の注釈を引用する場合には、その注釈書の題名を略語で載せる（凡例を参照）。

* * *

首尾

事の始と終と也。これは首尾あひかなひて結ぶ所をいふことなれば、正しくは首尾相応などいはずはか

なはぬことなれど、暫くいひならへるに随ひて。首尾とのみいふ。これより下は、旧注どもにいはれたる名目のまゝなり。

類例

其事其語の比例に。他し書の語。また歌などを引出たるを。類例といひならへり。これは注法の目也。

* * *

用意

これは作者の意を用ゐて、事におりたちてさまよくとりなしあつかふ事を、いひならひたり。たとへば、空蟬君のさまよくもてつけたるありさまを、用意ありなどいへる用意のごとし。

厳密な意味では「用意」は作者の思慮深い文章である。つまり、作者の用意が深い場面の叙述は思慮深く整えられているから、細部の配置や登場人物の動きは全て本当らしく表される。「空蟬」では、空蟬が暗い部屋の中、匂いで源氏の存在に気付き、軒端の萩を起こさず源氏が近づく前に部屋から逃げ出し、自分の変わりに軒端の萩を源氏の相手として残した場面がある。空蟬が巧みに源氏の誘惑から逃れることは彼女の思慮深さの証拠になる。逆に軒端の萩が源氏の誘惑に負けたことは彼女の思慮が浅い証拠になる。最終的には、物語の登場人物の動きを操作するのが作者であるから、登場人物の「用意」を「作者の用意」として解釈できる場合も多い。し

かし、広道の頭注では登場人物の「用意」か作者の「用意」かを指示しているのを判断することは複雑な問題なので、索引では広道がはっきり「作者の用意」と記している項目に「作者」と言う注を付け加えることにした。

* * *

草子地

物語の中なる人の心詞ならで、他より評じたることき所を草子地といへり。これは物語かたる人の語にとりなしたる作者の語也。その中に草子地ながら。しばらく其物語の中の人の心になりていふ所あり。また物語の中なる人の詞ながら。実は草子地よりいふ所あり。思ひわかつべし。

余光 余情

余光はにほひと訓む意にて、文外に打にほひて、いひしらぬ味ひあるを賞ていふ語。余情は其事竟たるに、猶かぎりなきあはれの含まりて聞ゆるをいふ。このふたつは共に形なき事なれど、言外ににほひ余りたるいみじさを評せんために、とり出たるのみ也。

此外にもなほあめれど。今は其大むねをのみ挙つ、他は准へてもさとりべし。

* * *

本来なら全ての項目に互り説明を加えるべきあるが、今回は

考察の及んでいる所々のみに説明を付け加えた。

四 おわりに

以上、広道の「法則」論で定義されている批評用語について、いささか考察を加えてみた。右の稿者の用例や説明などは非常に少ないが、索引の項目の数だけでも広道の本文に對しての用語の適用の豊かさがわかると思う。しかもその適用は、量のみにとどまらず、「総論」での定義と比較してみると、かなり厳密なものであったことが推測される。今後の課題としては、「評釈」の批評論と本文に適用されている「文章法則」の用語をさらに調査すること、また「○○の法」などとは明記されないながら、おそらく法則についての言及と考えられる注釈を取り上げ検討を加えることなどが挙げられる。その上で、それらの用語の優れている点や欠点がどこにあるかを明確にし、広道が考案した批評組織を探っていきたいと思う。

注

(1) 森川彰「源氏物語評釈」の出版「広道書簡」(「混沌」第五号昭和五十三年九月)から引用。山崎勝昭「源氏物語評釈」の一側面(「日本文学」第四十一巻第一号一九九二年二月)も参照。

(2) この論文の話題からはなれてゐる事だが、Gerard GenetteがDis-

cours du récit」ブルーストの *A la recherche du temps perdu* (失われた時を求めて) に適用した論⁹。又は M.M. Bakhtin が *La poétique de Dostoïevski (Problème poétique Dostoïevski)* で ドストエフスキの著作に適用した論などに述べられている叙述構造論は、広道の『評釈』『文章法則』論と共通点が幾つかある。しかし、Genette と Bakhtin の著作では、主にその叙述構造論に適切な例を名作から引用し、選んだ実例によって自分で考察した論議を説明することになっている。その実例は論議にぴったり合うのが当然なことだから、読者の了解を得やすい方法として文学批評論によく見られるものである。宣長も『玉の小櫛』などにこの方法をよく使っていると考えられる。それに対し、叙述構造論のような組織を考え出して、一冊の長編名作に全面的に適用する書物は、広道の『評釈』しか現在のところ見出していない。

- (3) 「帯木」、【評釈】二二七頁(室末岩男編、【国文注釈全書】第十一巻)、新編日本古典文学全集【源氏物語】第一巻 一〇七頁参照。【評釈】の引用に際しては句読点を私に施し旧字体はおおむね通行の字体に改めた。また【評釈】の傍線や()を付けた所も私に付したものである。

- (4) 「帯木」、【評釈】二二八頁。

- (5) 「総論」下、【評釈】五一頁。「いささかなる事の末々まで、あやしきまでたらひたる法則あり」。

- (6) 「古典文学レトリック事典」の「主客」項目(三三頁)参照(「国文学」解釈と教材の研究)一九九二年十二月臨時増刊号)。

- (7) 「帯木」、【評釈】一三九頁。

- (8) 「古典文学レトリック事典」の「照応」項目(三五頁)参照。

- (9) 曲亭馬琴「南総里見八大伝」の「九輯中帙附言」(岩波文庫

第六巻 七頁参照)。

- (10) 「花の宴」、【評釈】五五五頁。

- (11) 「夕顔」、【評釈】二六二頁参照。

- (12) 「南総里見八大伝」の「九輯中帙附言」(岩波文庫 第六巻 七頁参照)。「古典文学レトリック事典」の「伏線」項目(六二

- 一六三頁)と「観染」項目(三九頁)も参照。

- (13) 「桐壺」、【評釈】一〇八頁。

- (14) 「夕顔」、【評釈】二七三頁。

- (15) 「桐壺」、【評釈】七七頁。

- (16) 「桐壺」、【評釈】七八頁。

- (17) 「古典文学レトリック事典」の「省筆」項目(二六頁)参照。

- (18) 「若紫」、【評釈】三四九頁。

(Patrick Caddeau, Yale University,

East Asian Languages and Literatures, Ph.D. candidate)

<SR>33.10.b	<S>460.23.s	<W>393.5.b	<Y>268.7.s
<SR>66.5.b	<S>461.4.s	<S>425.9.b	<Y>282.7.h
<SR>66.9.b	<S>461.10.h	<S>433.10.b	<Y>330.21.s
<K>80.13.h.作者	<M>485.2.s	<S>435.10.s	
<K>90.4.s	<M>487.21.s	<S>443.12.b	余情
<K>93.12.s	<M>494.10.s	<S>475.11.b	<SR>56.20.b
<K>120.20.h	<HE>536.3.b.h	<M>485.22.細	<SR>57.1.b
<HG>121.15.b.新	<HE>540.20.s	<M>495.21.岷	<SR>66.19.b
<HG>127.12.b.h	<HE>542.7.s	<M>496.2.b	<SR>67.1
<HG>155.21.h	<HE>554.11.s.作者	<M>497.2.b	<K>88.14.h
<HG>201.20.h	<HE>555.22.s.作者	<M>501.11.b	<K>95.19.h
<U>228.1.h	<HE>557.22.h	<M>504.9.b	<HG>214.16.s
<U>228.4.h	<HE>559.7.s.作者	<M>505.1.b	<U>242.22.h
<U>228.16.h	<HE>559.21.s	<M>511.8.b	<Y>309.5.h
<U>232.22.h	<YS>716.12.拾	<M>512.23.s	<Y>330.23.s
<U>232.24.細		<M>513.21.s	<Y>332.9.h
<U>233.12.h	草子地	<M>518.20.s	<W>345.7.細
<U>235.19.s	<SR>50.10.b	<M>529.9.b	<W>394.1.h
<U>235.23.s	<SR>66.11.b	<M>530.3.湖	<HE>536.18.b.h
<U>245.5.s	<SR>66.13.b	<M>531.18.s	<HE>537.2.h
<Y>269.10.s	<SR>66.15.b	<M>531.12.b	<YS>718.2.細
<Y>296.21.h.作者	<SR>66.17.b	<M>532.10.b	
<Y>304.11.s	<SR>72.1.b	<HE>542.20.細	
<Y>327.6.h.作者	<K>97.5.b	<HE>543.5.細	
<W>338.23.s	<K>99.2.b	<HE>547.9.b	
<W>345.8.細	<K>115.1.b	<HE>551.9.b	
<W>351.24.細	<HG>220.20.s	<HE>552.2.s	
<W>352.11.s	<HG>223.23.s	<YS>696.14.b.余	
<W>367.15.s.作者	<U>233.16.h	<YS>696.16.b.s	
<W>382.7.s	<U>235.1.s	<YS>709.17.王補	
<W>385.17.細	<U>235.13.s	<YS>732.14.s	
<W>402.14.s	<U>243.1.b	<YS>764.8.b.湖師	
<S>415.8.b.h.作者	<Y>257.6.b		
<S>415.12.b.h	<Y>264.24.王	余光	
<S>415.19.b.h	<Y>265.8.s	<SR>13.17.b	
<S>441.21.s	<Y>268.21.王	<SR>66.19.b	
<S>454.22.s.作者	<Y>329.9.b	<SR>66.20.b	

報店	<HG>192.12.s	<M>491.23.s	<Y>289.4.s
<SR>29.14.b	<M>478.7.b.h	<M>528.24.s	<Y>327.4.h
<SR>33.6.b	<M>512.8.s	<HE>542.8.s	<Y>330.2.h
<SR>52.19.b	<YS>743.12.b.s	<HE>548.15.s	<Y>331.15.h
<SR>53.1		<HE>549.11.s	<W>340.11.s
<SR>53.8	語脉／語脈	<HE>554.2.s	<W>350.3.h
<SR>55.12	<SR>66.7	<YS>668.16.s	<W>363.8.s
<SR>65.18.b	<SR>66.9	<YS>668.20.b.s	<W>364.8.湖師
<HE>535.8.h	<SR>71.15	<YS>714.18.b.s	<W>404.13.湖師
	<SR>71.17	<YS>743.2.b.s	<W>404.17.s
諷諭	<SR>71.18	<YS>749.8.s	<W>406.11.湖
<SR>25.7.為	<SR>71.20	<YS>761.9.s	<W>410.24.湖
<SR>25.11.b.為	<SR>71.7.b		<S>428.11.h
<SR>25.14.b	<K>96.13.s	首尾	<S>434.19.湖師
<SR>25.15.b.玉	<K>111.13.s	<SR>53.18.b	<S>461.12.h
<SR>26.2	<HG>131.16.s	<SR>60.1.b	<M>500.23.s
<SR>26.9	<HG>131.21.s	<SR>66.14	<M>528.15.湖
<SR>26.1.b	<HG>136.20.s	<SR>66.15	<HE>540.21.h
<SR>29.13.b	<HG>144.21.s	<SR>66.16	
<SR>29.18.b	<HG>148.20.s	<SR>66.18	類例
<SR>30.3.b	<HG>155.4.s	<K>78.4.h	<SR>63.8
<SR>30.6.b	<HG>172.22.s	<K>92.5.s	<SR>66.1.b
<SR>30.11.b	<HG>177.6.s	<K>104.4.h	<SR>66.3.b
<SR>30.15.b	<HG>184.6.s	<K>119.18.s	<W>360.4.s
<SR>30.18.b	<HG>187.13.s	<HG>160.13.湖	<GS>609.18.b.s
<SR>31.11.b	<Y>297.3.s	<HG>182.18.s	<GS>612.3.s
<SR>31.17.b	<Y>300.11.s	<HG>203.9.h	<YS>687.10.b.余
<SR>34.7.b	<Y>304.16.s	<U>228.9.b.h	<YS>691.2.s
<SR>38.2	<Y>306.4.s	<U>236.12.s	<YS>692.19.s
<SR>66.2	<Y>316.7.s	<U>240.14.s	<YS>692.18.b.s
<Y>332.10.h	<Y>327.19.s	<U>246.15.h	<YS>708.2.b.s
	<W>374.8.s	<Y>249.14.b.h	
文脈	<W>400.3.s	<Y>280.2.s	用意
<SR>66.7	<S>429.21.s	<Y>283.13.h	<SR>18.1
<SR>66.8	<S>448.6.s	<Y>285.6.s	<SR>19.5
<SR>72.4	<S>451.10.s	<Y>286.12.h	<SR>19.7
<SR>72.6	<S>469.8.s	<Y>287.20.s	<SR>29.9.b

<W>334.11.h	<S>448.15.h	<S>448.16.h	<W>345.5.s
<W>335.16.h	<M>478.8.b.h	<S>455.10.h	<W>349.17.h
<W>349.1.h	<M>479.13	<HE>535.8.h	<S>433.14.h
<W>368.18.h	<HE>536.16.h	<HE>536.4.b.h	<M>518.13.h
<W>380.4.h		<YS>663.18.s	<HE>549.16.s
<W>382.7.s	結構		<YS>717.12
<S>419.14.h	<SR>51.20.b	緩急	
<S>419.19.h	<SR>53.6.b	<SR>65.7	余波
<S>452.7.s	<SR>54.16.b	<GS>565.11.s	<SR>57.18
<M>477.20.b.h	<SR>64.19.b	<GS>565.11.s	<SR>65.7.b
<M>478.13.h	<SR>64.20.b		<SR>65.10.b
<M>478.2.b.h	<K>78.1.h	反覆	<HG>193.14.h
<M>530.23.s	<K>80.13.h	<SR>58.3.b	<U>228.2.b.h
<M>532.11.s	<K>120.18.h	<SR>65.14	<Y>300.20.h
<M>533.16.h	<Y>273.22.h	<SR>65.16	<W>334.18.b.h
<HE>535.17.h	<Y>279.11.s	<HG>131.21.s	<W>368.6.s
<HE>536.2.h	<Y>285.4.s	<S>415.10.h	<W>368.19.h
<HE>536.5.h	<W>335.12.h	<S>416.6.b.h	<S>417.10.h
<HE>557.24.h	<W>350.24.s	<S>448.8.s	<S>429.1.h
	<W>367.16.s	<S>464.24.s	<M>479.15.b.h
伏線	<S>476.4.s	<S>470.19.s	<M>525.24.新
<SR>52.2.b	<M>478.5.h	<M>492.11.s	<M>526.1.s
<SR>52.8.b	<M>479.15.h	<M>518.21.s	
<SR>64.12.b	<YS>664.11.玉		種子
<SR>64.14.b	<YS>664.7.b.s	省筆	<SR>52.8
<SR>66.11	<YS>675.17.s	<SR>54.9	<SR>65.14.b
<SR>71.1		<SR>57.4	<SR>65.16.b
<K>119.11.h	抑揚	<SR>57.4	<K>92.24.h
<HG>193.16.h	<SR>65.1	<SR>57.10	<HG>127.2
<HG>199.16.h	<K>78.18.h	<SR>57.16.b	<HG>139.24.s
<Y>247.15.h	<K>112.16.s	<SR>57.16.b	<HG>174.18.s
<Y>251.8.s	<U>233.13.h	<SR>65.1.b	<HG>182.19.s
<Y>273.13.h	<Y>256.22.h	<SR>65.6.b	<W>334.1.b.h
<W>334.16.h	<W>334.11.b.h	<Y>270.16.h	<W>346.17.s
<W>344.6.s	<W>338.10	<Y>290.5.h	<M>528.22.s
<W>368.20.h	<S>415.18.h	<Y>331.11.h	<HE>555.17.s
<S>429.1.h	<S>416.6.b.h	<W>338.15.s	

主客	<SR>52.3	<S>415.3.h	<S>444.6.h
<SR>30.4.主	<SR>52.6	<S>417.15.h	<M>478.6.h
<SR>30.17.主	<SR>64.1	<S>449.5.h	<M>487.3.s
<SR>47.1	<K>119.5.s	<S>452.15.h	<M>494.22.s
<SR>47.4.主	<HG>182.7.s	<HE>539.5.s	<HE>552.10.h
<SR>47.8.主	<S>416.9.h		<HE>559.4.h
<SR>47.13.客	<M>478.4.b.h	照対	
<SR>47.3.b.主	<M>480.8.h	<SR>50.9.b	相照
<SR>47.3.b.客	<M>530.7.h	<SR>50.11.b	<K>88.15.h
<SR>47.4.b.客		<SR>52.20.b	<U>232.10.h
<SR>47.7.b.主	正対	<SR>53.3	<Y>250.8.h
<SR>47.8.b.客	<SR>51.14.b	<SR>53.10	<S>450.15.s
<SR>51.12.b.主	<SR>64.5	<SR>53.14	<M>477.16.b.s
<SR>52.9	<SR>64.7	<SR>64.15	<M>478.4.h
<SR>52.10.主		<SR>64.16	<M>530.7.h
<SR>54.3.b.主	反対	<Y>249.1.h	<HE>544.13.s
<SR>56.3.b.主	<SR>52.9	<S>416.20.h	<HE>558.23.s
<SR>63.15.b	<SR>52.12	<M>479.12.h	
<SR>63.19.b	<SR>64.8	<M>479.15.b.h	間隔
<K>78.17.h	<SR>64.10	<HE>555.12.h	<SR>64.4.b
<K>101.14.h	<SR>64.14		<M>492.12.h
<K>115.11.h	<K>78.17.h	照応	<M>496.11.s
<K>116.3.h.主	<K>89.3.h	<SR>33.14.b	
<K>119.4.s.主	<HG>126.10.h	<SR>50.14	伏案
<HG>139.10.h.主	<HG>127.18.b.h	<SR>50.7.b	<SR>30.2
<Y>257.11.h	<HG>140.24.s	<SR>52.4	<SR>33.13
<S>462.9.s	<HG>142.12.s	<SR>64.15	<SR>50.14
<S>476.7.s.主	<HG>193.15.h	<SR>64.19	<SR>50.5.b
<M>493.24.s.主	<HG>193.16.h	<K>100.11.b.s	<SR>53.5.b
<M>530.7.h	<HG>201.20.h	<Y>262.17.h	<SR>64.12.b
<M>533.15.h.主	<U>227.6.s	<Y>290.2.s	<SR>64.13.b
<HE>535.16.s.主	<U>228.17.h	<W>333.13.b.h	<K>108.10.h
<YS>717.11.主	<U>232.22.h	<W>333.13.b.h	<HG>128.3.h
	<W>333.1.b.s	<W>347.12.s	<HG>218.14.h
正副	<W>334.2.h	<W>350.21.h	<Y>247.13.h
<SR>47.1	<W>413.7.s	<W>388.7.s	<Y>326.22.h
<SR>47.4.b	<S>414.15.b.s	<W>401.21.s	<Y>327.19.h

『源氏物語評釈』法則索引

索引の凡例

一、索引の項目は次のように組み立てる。〈巻題〉頁.行. (b) .(h又s). (注)。

例一<K>101.14.h

二、巻題には次の省略を使う。

<SR>	「総論」 (序文)
<K>	「桐壺」
<HG>	「帚木」
<U>	「空蟬」
<Y>	「夕顔」
<W>	「若紫」
<S>	「末摘花」
<M>	「紅葉賀」
<HE>	「花宴」
<GS>	「源氏物語語釈」 (補遺部分)
<YS>	「余釈」 (補遺部分)

三、「頁」と「行」は『源氏物語評釈』（室末岩男編、『国文注釈全書』第十一卷）に相当する頁番号と行数である。

四、「b」は上段と下段のある場合に、下段を示す記号である。

五、「h」は広道の「評」と記されている注釈、「s」は「釈」と記されている注釈を示す。

六、「注」はその項目に関する特徴、又は以前の注釈書の引用を示す。注釈書の題名は次の通りに略した。

細	細流抄
湖	湖月抄
湖師	湖月抄師説
岷	岷江入楚
拾	源注拾遺
為	紫家七論
新	源氏新釈
玉	玉の小櫛
玉補	玉の小櫛補遺
余	源注余滴

この索引を作るために用語の適用箇所を網羅的に探し記したが、見落としした例文や記録を間違えた所があるかもしれない。大方の御教示、御叱正を賜りたい。